

日蓮教団と為政者

身延山大学 木村中一

日蓮教団において室町末期より江戸期は一大変革期であった。それは織豊時代を経て徳川政権への移行期に強力な為政者や統一政権が誕生したことに起因し、日蓮教団はその布教伝道活動や教学研鑽方法を再編成していく。この再編成の要因となった日蓮教団と為政者との代表的な事件が、①安土宗論（天正七年・一五七九）、②方広寺大仏殿千僧供養会（文禄四年・一五九五）、③慶長法難（慶長十三年・一六〇八）などであり、本論は上記の事件を確認し、これらが要因となり日蓮教団で再編成された布教伝道活動や教学研鑽方法について考察するものである。

安土宗論は天正七年五月、織田信長の命により安土において日蓮教団と浄土宗との間で行われた宗論である。この宗論の発端は普伝日門が安土城下において強烈な折伏伝道を行い、当地の有力者であった大脇伝介などが日門の熱心な帰依者となったことに起因する。この活動を「目に余る」と考えた織田信長は日蓮教団と浄土宗の宗論を行わせ、結果として日蓮教団は敗北と決せられたのであった。

豊臣秀吉の時代になると、秀吉は仏教を擁護する態度を示し、日蓮教団に対しても先の敗北にて提出させられた、折伏伝道活動を禁じた「起請文」を破棄。天正十二年（一五八四）には改めて弘通公許を日蓮教団に与えた。しかし京都東山に大仏殿建立を発願したことを契機に、先祖並びに亡父母追善のため、真言・天台・浄土・日蓮などの八宗より各百名の僧を招き、千僧供養会を修する旨を通達してきた。為政者といえども法華未信の秀吉の招請に応ずることは日蓮以来の純正不受不施義に反することであり、結果として、その出否をめぐり日蓮教団は受派・不受派と二分することとなるのである。

その後、慶長十三年には常楽院日経が浄土宗の綽道が宗論を起こす。時の為政者である徳川家康は、この宗論を「世情を乱すものである」と感じたようで、浄土宗からの訴えもあり江戸城での対論を命じる。しかしこの前夜、日経は暴徒らに襲われ重傷を受けた。当然の如く日蓮教団は対論の延期を申し出たが容認されず、日経は戸板に乗って江戸城に登城となるのである。このような状態で、浄土宗の問答に対し日経は返答することが出来ず敗退することとなり、そのまま投獄されることとなった。

このように日蓮教団の変革期となった室町末期より江戸期の代表的な事件を確認すると、為政者からの弾圧などにより、以前までのような強義折伏伝道活動は封じられ、日蓮以来の純正不受不施義を標榜することは難しくなっていたことがわかる。これらは日蓮教団の存亡に関わり、一大決断をなさねばならない事項へと変化していく。つまり今までの日蓮教学を表に出す伝道活動では更なる教団弾圧を生むことは明らかで、日蓮教団は従来の「折伏伝道布教」を、所謂「摂受的な伝道布教」へと移行していき、教学修学内容もまた日蓮教学中心から天台教学中心の研鑽方法へと大きく変化せざるを得なくなった。

キーワード 日蓮教団・織豊時代・為政者